



山里キャンパスに込められた思い

マリアヌス・パレ・ヘラ

南山大学山里キャンパスは今年で60周年を迎える。設計者のアントニン・レーモンド氏は、本キャンパスの設計に込めた思いについて、次のように述べている。このキャンパスが「日本の伝統に沿って、『記念碑的』ではなく、『人間的』なスケールを保ち、デザインを真に『機能的』、あらゆる意味で『シンプル』、『直接的』、『経済的』で、唯一の装飾が構造自体になるようなデザインを保つことができれば、私は本当に価値のあるものを達成しただろうⁱ。

著名な建築家レーモンドの思いが現実になっているかどうかは、本キャンパスの60年間の歴史が物語っている。デザインが「機能的」かどうか、「経済的」かどうかに関しては、時代と共に評価が変わるかもしれない。また、構造自体が装飾になるという面では、見る者の美的センス次第であろう。

しかし、日本の伝統に沿って、「記念碑的」ではなく、「人間的」なスケールを保つという面では、レーモンドの思いは実現しているような気がする。「日本の伝統」というのは、よく言われているように、「調和、*harmony*」という言葉で表すことが出来る。レーモンドは、ひとり目立っているような建物ではなく、多様な中でそれぞれが個性を保ちながら全体と調和するキャンパスを目指していた。その意味で、山里キャンパスのデザインは「人間的」と言える。キャンパス移転当時の沼澤喜市学長の目にもそのように映っている。沼澤学長によれば、このキャンパスを訪れる人は「誰もがすぐに、…[建物の]異なる構造間の調和に気づくだろう。それぞれの建物に特徴があり、その多様性が単調な一般的な校舎とは異なるユニークな大学の印象を与えている」とⁱⁱ。

レーモンドがこのキャンパスのデザインを手掛けた時に大事にしていたことはもうひとつある。それは、地形に逆らわず、建物が自然と調和することであった。レーモンドは名古屋の街が見渡せる山里町の丘の上の魅力的な景観と特徴的な植生にも気を配り、可能な限り自然な地形を保つように努めた。結果として、ひとつひとつの個性的な建物が自然の地形に沿って建てられることになった。人間と自然との調和、それがレーモンドの思い描いたカトリック南山大学の理想のキャンパスだと言えるであろう。

ところで、カトリック大学をカトリック大学たらしめるものは何か。高等教育機関としてのカトリック大学の特徴は何か。ヴァチカンの文化教育省長官であるJosé Tolentino de Mendonça枢機卿によれば、カトリック大学を特徴づけるのは、そこで「信仰」と「理性」が出会い、真理が熱心に探求され、一人ひとりが自分の人間性の完成 (*full humanity*) に達成できる場である。大学には、多様な人間、多様な知識、多様なアイデンティティ、多様な役割をもつ人々が集まっている。カトリック大学は、それらの多様なものの間の絶えざる「対話」に開かれる場、インクルージョンと協力 (*inclusion and participation*) の場、相互の助け合いの場とならなければならない、とⁱⁱⁱ。

今年度の学長方針で掲げられる“3Ds”：Dignity (尊厳)、Diversity (多様性)、Dialogue (対話)と合わせて考えると、60年前にレーモンドが思い描いた南山のキャンパスは、カトリック大学の理想とアイデンティティを象徴するものだとと言えるのではなかろうか。

(HERA, Marianus Pale : 人文学部准教授)

ⁱ The Japan Times (Special edition), Nanzan Mirror, May 1964, p. 1 (以下、Nanzan Mirror)

ⁱⁱ Nanzan Mirror, p. 1

ⁱⁱⁱ 2023年11月23-24日、ローマで行われた「*Conference on Pastoral Care in Catholic Universities*」の基調講演において

建築家アントニン・レーモンドの天地創造

はじめに

南山大学は、神言修道会(Societas Verbi Divini:ラテン語, 略称SVD, 英語ではSociety of Divine Word)を母体とするカトリック総合大学である。2024年は、本学が名古屋市昭和区五軒家町から、現在の昭和区山里町にキャンパスを移転した1964年から数えて60年目の年にあたる。

チェコ出身の建築家アントニン・レーモンド(RAYMOND, Antonin, 1888-1976)は、山里町の地に南山大学総合計画の第1・2期工事として8つの校舎を設計し、1964年に完成した。そのキャンパスの歴史や美しさについて、学生やその他広く国内外の人々に伝えようと「YAMAZATO60プロジェクト」が始まったのである。

レーモンドは、フランク・ロイド・ライト(WRIGHT, Frank Lloyd)とともに帝国ホテル建設のために1919年に初来日した建築家で、日本にモダニズムの理念に基づく作品を多く残し、前川國男、吉村順三や増沢洵など著名な日本人建築家に大きな影響を与えた人物として知られている。本学には、60年経った今なお、建築を学ぶ学生たちが校舎の見学に訪れている。

本稿では、カトリック文庫通信の趣旨に沿い、レーモンドがキャンパス内に展開したキリスト教にかかわるモチーフや、第3期工事(1964-1966)の神言神学院の建築をめぐって残されたレーモンドの書簡等に焦点をあてて紹介することとした。カトリック大学ゆえに施されたと思われるキリスト教的意匠や、キリスト教関連施設そのものである神言神学院を取り上げることで、レーモンドのキリスト教との向き合い方が臆気ながらもみえてくるのではないかと考えたからである。



1. M棟鉄製レリーフとパッセスクエア

レーモンドは、生涯を通じてカトリックだけではなくその他の宗派も含めた教会を数多く設計している。教会は信仰の場であり、信者や聖職者が集い、長時間その内部に身を置き、信仰をはぐくむとともに布教の場としても重要な空間である。そのため設計にあたってはキリスト教全般についての知識の他、教会内で取り行われる典礼—さまざまな祭事・儀式・儀礼—をその由来、目的、理念等にわたり理解していなければならない。ヨーロッパで生まれ育ったレーモンドは、キリスト教が身近であったであろうし、東京や軽井沢で得た人脈には日本で布教活動を行う外国人聖職者も数多く含まれていたことから、そのような人々から依頼され教会を設計するに至ったことは不思議ではない。

一方でレーモンド自身の宗教的背景がどのようなものであったのかという疑問も湧いてくる。その人の宗教観や信仰については本人以外が語れるものではないが、自伝やいくつかの資料からぼんやりと浮かび上がる輪郭についてははじめに少し触れてみたい。

1. アントニン・レーモンド

(1) レーマンからレーモンドへ

1888年5月10日、レーモンドは父アロイ・レーマンと母ルジーナの間の6人の子どもの第3子長男、アントニン・レーマン(RAJMAN, Antonín)としてオーストリア=ハンガリー帝国(現在のチェコ)クラドノで生まれた。クラドノはプラハに近接する都市でボヘミア地方の重工業の誕生地である。

レーモンドが10歳の時に亡くなった母親の葬儀は、「当時のヨーロッパのカトリックで行なわれていた綿密な、宗教行事に従った」とある。一方で「父方のことは出生地がフリエトヴィチェであること以外知らない」と書いている。レーモンドは自身をチェコ人でスラブ系であると自覚しており、ユダヤ系の記述を避けているが、父親はユダヤ人であっ



2. アントニン・レーモンド

たというのが現在の定説であるようだ。父方の祖父のアブラハム・レーマンという名もユダヤ系である所以とされている。『アントニン・レーモンドの建築』には次のように書かれている。

第一次大戦末期にチェコ軍はドイツに侵攻し、終戦の1918年には、チェコスロバキアとしてオーストリア・ハンガリーから独立。しかしそのうらみをかけて、30年代にドイツは次第にチェコスロバキアを併合しようとする。1938年にヒトラーは先にオーストリアを併合、チェコ粉砕のための秘密指令が出され、そして翌年にはドイツ軍はチェコに侵入し、戦乱の地となった。その結果、レーモンドの父と姉二人は行方不明、弟フランクはオーストリア騎兵として戦争中に行方不明。弁護士の子弟ビクターはスウェーデンへ逃れる途中で殺され、末弟エゴンはユダヤ人をかくまった罪で銃殺されたという。

レーモンドの家族は早くに亡くなった母親を除く全員がこの時期に命を落としているのである。「私は小さい時から、オーストリア・ゲルマンの権力に対抗する、熱烈なチェコへの愛国心の中で育っていた」とあるが、この事実をどのように受け止めたのであろうか。

自伝には「姓の綴りRajmanについては何ともパズルめいたものがあつた。のちに私がアメリカに渡ってからわかつたのだが、人びとはその姓のjをzhのように発音し、チェコ語で実際に発音するjと同じようなyではなかつた。私はラジマンのようによばれるのに耐えられず、アメリカ市民権の申請の際、現在の綴りのレーモンドに変えた」とあり、「神秘的自然主義建築家アントニン・レーモンドの原象：流浪（ディアスポラ）するコスモポリタン(1)」には「土屋（土屋重文のこと、建築家）はそのRajmanこそユダヤ人の証であるとする」とある。いずれにしても我々の知るアントニン・レーモンドは、本来のレーマンという名を捨て新たな名前前で生まれ変わった人物なのである。

(2) アントニン・レーモンドとして

『おしゃれな住まい方：レーモンド夫妻のシンプルライフ』には次のような記述がある。

チェコという国は、20世紀のヨーロッパ諸国の中でも、特に極端に犠牲を強いられてきた。その国に生まれ教育を受け、祖国を離れアメリカに向かったが、最初のブルックリンへの上陸は密入国で、旅券無しで生活を始めた。5年後にヨーロッパに戻り、イタリアで絵を描く生活をしているが、どうやってアメリカを出国したかは、書かれたことが無い。しかもその後、第一次世界大戦勃発の兆候が見えると、ローマの米国大使館で旅券を取得した折にアメリカ市民権も得ているが、どうしてそうなったのかわからず、運が良かったとしかいえない。

レーモンドは第一次世界大戦と第二次世界大戦に跨がる時代を生き、生まれたチェコも移り住んだ日本も激戦の地となった。第一次世界大戦直後の1919年から第二次世界大戦の兆しがみえ始める1938年まで、そして第二次世界大戦後の1948年10月に再び来日してから1972年までの通算約40年間を日本で過ごし最後はアメリカのペンシルベニア州ニューホープで亡くなった。『内田魯庵山脈』にあるように「レーモンドには、チェコからフランス、アメリカそしてイタリア、再びアメリカ、日本、インド、アメリカといった、軽く国家を超え世界市民的な生き方が自然に身についていた」のであろう。

またナポリから避難民をのせてニューヨークへ向かう船の中で出会い、生涯のパートナーとなったフランス人のノエミを始め、アメリカでのライトとの出会い、ライトと共に来日した日本ではチェコスロバキア共和国名誉領事や名門の東京倶楽部や東京ゴルフ倶楽部の会員となり、国籍を超えた様々な人々との出会いがあり、その縁で設計することもあった。その中には奇人・趣味人として知られた三田平凡寺、星製菓の創業者である星一（星商業学校設計）、政治家の後藤新平（自宅設計）、フランスの劇作家・詩人で駐日大使でもあったポール・クロードル（大使館内の自宅設計）、実業家井上房一郎（自宅・群馬音楽センター設計）など多種多様な人々が含まれる。



3. レーモンド（左）とフランク・ロイド・ライト

今年出版された『非凡の人三田平凡寺：趣味家集団「我楽他宗」の磁力』には、「ノエミ・レーモンドは、前衛的なティーチャーズ・カレッジ・ニューヨークで、グラフィックデザイナーの教育を受けた後、1919年に神智学協会に入り、西洋と東洋の智の統一を目指す思想の人生を賭けた探求を開始する」と書かれている。レーモンドはノエミの友人の紹介でライトと知り合い、やがてライトとともに1919年に来日し、ライトの紹介によって日本で神智学協会につながる縁を得たようである。レーモンド夫妻が神智学協会の活動に熱心であったことは、『非凡の人三田平凡寺』に掲載された何枚かの写真からもわかる。「神智学は、ロシア生まれのヘレナ・ブラヴァツキー夫人らによって1875年に米国で結成された宗教団体で、世界共通の根源的宗教を標榜した。瞑想や天啓によって宇宙の真理、神と繋がり、東西宗教の根源を発見したと主張するらしい」とあり、宗教団体とみなすかどうかについては異論もあるようだが、神智学は諸宗教間の差異を超えた普遍的倫理を追求して、運動を世界的に展開し、その影響は当時の世界の多くの思想家、芸術家にも及んだ。一方、「我楽他宗」とは、大正期から昭和初期にかけて活動していた蒐集好きで趣味を追求する人びとの集まりで、この我楽他宗を率いたリーダーが平凡寺を号する三田林蔵であり、三田平凡寺と我楽他宗は最近まで多くの人にとって謎に包まれた存在であった。レーモンド夫妻など我楽他宗の外国人メンバーの多くは「神智学」の実践者でもあり西洋と東洋の智の融合を目指す神智学協会との関係から、我楽他宗は単に趣味人たちの集まりというだけでなく、芸術と宗教を結びつける国際的なネットワークでもあった。

チェコ系とドイツ系、そしてユダヤ系などが混在する複雑な母国で青春時代を過ごし、チェコ語・ドイツ語・フランス語・英語を話すことができたレーモンドは、第一次世界大戦の際にはアメリカ軍の諜報将校に抜擢された経験もあったことから、人とのコミュニケーションが巧みであったのかもしれない。いずれにしてもレーモンド自身が獲得し育てた人脈がレーモンドの建築を支えたことは間違いない。



4. 新校舎落成式でのレーモンドとノエミ (1964年5月30日)

(3) コスモポリタン、地球人、生まれつきのボヘミアン

「軽く国家を超える世界市民的な生き方」のレーモンドであったが、一方で、あるいはそれ故に、日本における生活は非常にシンプルなものだったようだ。「南山大学の設計に於ける『建築家アントニン・レーモンド』」には、晩年の日常が次のように描かれている。

ライフスタイルから見たレーモンドは、質素で堅実。夫人ともども贅沢な面はいっさいありませんでした。しかもどこにいても同じ生活を365日繰り返すのです。朝は4時に起床。4時半ぐらいから散歩に出て、朝食前まで絵や彫刻といった趣味に没頭します。9時から5時半までアトリエで仕事をし、夜は8時から9時には就寝されます。食事は、お昼の30分前になるとコックさんがウイスキーを持ってきます。スタッフのそばで図面をチェックしていても関係なく、ダブルで2、3杯は飲んでいました。昼食は肉料理を中心にしっかりとっていましたが、夜は素麺や蕎麦とかで軽くすませていました。主治医のアドバイスもあったようです。

レーモンドの日本における生活の中からも宗教的な行動を見つけることは難しいようである。レーモンド建築設計事務所で働いていた建築家の松野高久による「神秘的自然主義建築家アントニン・レーモンドの原象：流浪（ディアスポラ）するコスモポリタン(1)」では、「休日の土曜日に事務所内で只一人出勤して図面を描いていると、レーモンドがアトリエから事務所に入ってきて、ブランデーの酒杯を手にして私の机の傍らに立ち、『さあ、家に帰りなさい。母親や家族と共に過ごしなさい』とアドバイスを受けたことを今でも鮮明に記憶している」とあり、ユダヤ人社会の安息日にあたる金曜日の夜から土曜日の夜にかけては仕事をしないという習慣がみられたものの、ユダヤ教の会堂であるシナゴグへ行くなどの行動は見られなかったようである。またキリスト教の教会へ通うこともなかったようである。

松野は「私はレーモンドのその『内在的必然性』としての『原像』を出生、生活した郷里のチェコの歴史、風土、古代からの建築そして血脈から模索しようとし」、レーモンドの原像を「流浪（ディアスポラ）するコスモポリタン」と表現した。ディアスポラは「撒き散らされたもの」というギリシア語に由来する言葉で、パレスチナ以外の地に移り住んだユダヤ人やそのコミュニティを指すことが多いそうである。

また、松野と同じくレーモンド建築設計事務所で働いていた土屋重文は、『チャーチ&チャペル：アントニン・レーモンド：日本：1935-1970』の中で、以下のように記している。

学生までの22年間住んだチェコ人でもなく、国籍はアメリカであったが通算して23年間暮らしたアメリカ人でもなく、43年の長きにわたって過ごした日本人でもなかった。ジプシーのように祖国を失い、そのアイデンティティーの喪失の空洞を埋めようとおそらく意識はせずに夢中で建築、絵画、音楽、そして戦前の日本文化を探求したのではないか。それは、正しく、禅僧のようなストイックで気の遠くなるほどの長い孤高の戦いであつたと思える。そこに触れないと、あの寛大で慈愛に満ちた行動を理解することはできない。私の接した最晩年のレーモンドさんは、私から見て「地球人レーモンド」になることによって、失ったアイデンティティーを取り戻したように思える。そのアイデンティティーを取り戻そうと足掻いていた頃、フランク・ロイド・ライトの助手として1919年、31歳で念願の日本に来ることができた。西洋文化に侵されていない戦前の日本の町並みと民家の美しさに魅了される。そして、日本人の慎ましい生活、武士道の心を感じる人間性に触れ、安住の地を見つけた感をもったと思う。

レーモンドに接した人々は、その生き方を「コスモポリタン」、「地球人」、「生まれつきの『ボヘミアン』（『アントニン・レーモンドの建築』）」などと表現した。そこには国籍や民族、宗教を超え、自分を信じて、激動の時代を生き抜いたひとりの人物の姿が浮かび上がってくるようである。

2. 神言神学院

(1) 神言神学院の設計

神言神学院は本学の設立母体である神言修道会が直接経営管理するカトリック司祭・修道者・宣教師の教育・養成機関で、聖堂の他に、神学生のための教育の場である神学校、神父や神学生の寝食を含む生活全般にかかわる居住スペースなど多岐にわたる施設や設備を備えている。中庭を中心に聖堂が建ち、聖堂の周りの廻廊はそのまま建物に連なり、2007年に増築された大学のB棟とC棟の間から、反対側は山手通門からその姿を確認することができる。大学と同様に、建物の配置や、建物と建物をつなぐ小道の通し方には自然環境を極力残すというレーモンドの考え方が貫かれている。



5. 神言神学院全景

神言神学院は1964年12月に着工、1966年5月26日に落成式が行われた。レーモンドの自伝には次のように紹介されている。

神学院の中心でもあり、魂でもある礼拝堂は、平面的に四方を囲まれて、敷地の最高所に置かれ、大きく廻廊を廻らす囲まれた内庭をつくる。西棟の受付部分、東棟の食堂と娯楽室部分が低層であるため、礼拝堂はその建物を超えて聳える。北棟には修道士と神学生、神父たちの部屋があり、病室も同様に、すべてが南側におかれた礼拝堂と内庭に面している。東棟(南棟の誤りか)は年少の神学生が入り、図書館と教室を備え、南の庭や運動場が見渡せる。日本ではどこにあっても、太陽に面することが重要であり、大学のようにこの神学院でも主要な部屋の大部分が南面しているのである。



6. 神言神学院聖堂西側 (2012年撮影)

他の建物を隔てていた)神言神学院の設計を総合計画の第3期工事として依頼されたものと思われる。

レーモンドは神言修道会に所属する同郷のフランシス・バブリク (BABULIK, Francis, SVD) 神父と親交があり、第6代南山学園理事長ゲルハルト・シュライバー (SCHREIBER, Gerhard, SVD) 神父を紹介された。シュライバー神父については「バブリック神父 [ママ]に比べると彼は特別な啓発精神の持ち主で、人生や芸術の絶対価値について驚くべき理解力をみせた。そしてシュライバー神父は、非常に限られた予算ながら、名古屋の神言修道会による南山大学のデザインで、ほとんど無限の自由を私に与えてくれたのである」とある。レーモンドは神言修道会の多くの神父との付き合いの中で、大学に近い(現在は隣接しているが、当時は

設立から60年近くを経た現在も、神言神学院は隣接した大学の喧騒からは一線を画して静かに建っている。そのため外から眺めて通り過ぎるばかりの神言神学院の聖堂を久しぶりに見学したのは2024年7月のことであった。我々はその時に、現在の院長リチャード・ジップル(SZIPPL, Richard, SVD)神父より、レーモンドの書簡が残されていることを知らされたのである。

(2) 残された書簡

神言神学院にはレーモンドと神父たちとの間に交わされた書簡(別表参照)やその他関連の史資料が2冊のファイルに綴られて大切に保管されている。このうち書簡は50通ほどで、ほとんどは英語で書かれているが、ドイツ人の神父によってドイツ語で書かれたものもわずかに残されている。レーモンドの出自からドイツ人に対して複雑な感情を抱いていたように書かれている資料もあるが、「単にチェコ人だからドイツ嫌いということではなく、ドイツ的精神の非人間的部分を憎んでいた」(『アントニン・レーモンドの建築』)との見方もある。また、レーモンドはライトを評して「彼は、粗野なアメリカの個人主義にふさわしく、常に彼個人の意見を表明してきた」とも述べており、逆説的に自分自身は施主の意向も汲み取ることを表明しているともいえよう。実際、書簡からは建築家レーモンドと施主であるドイツ人神父との間には、意見を交わしながらも強くあたたかい信頼関係が築かれていたことがわかる。

1962年11月15日付の最初の書簡は、レーモンドが滞在していたニューホープの自宅からアルベルト・ボルト(BOLD, Albert, SVD)神父に宛てたものである。当時、第6代南山学園理事長のシュライバー神父はアメリカ転任を命じられ、ボルト神父は理事長の不在中、南山大学総合計画の陣頭指揮を執っていた。レーモンドは「私はあなた方の希望にすべて応えたいと思いますし、あなた方の長年の経験に基づくご意見をお聞かせいただければこれほどうれしいことはありません」と記している。続けて「その一方で、50年にわたる経験に基づく私の考えを申し上げ、あなた方の希望との調和を図らなければなりません」として具体的な9つの事柄に言及し、「良い計画は良い時計と同じです。小さな変化でも全体のバランスを崩してしまいます」と建築家としての自身の役割を明確に伝えている。多くの書簡は工事が着工された1964年から1965年にかけてのものであり、1965年に入ると、次第に明らかになってきた第二ヴァチカン公会議による新しいミサ典礼に基づく聖堂内の設計が話題の中心となっていく。その頃の書簡は、当時南山大学文学部神学科長であり多くの会員の養成に尽力していたアルトゥール・パウル・ラング(LANG, Artur Paul, SVD)神父とレーモンドとの間で遣り取りされたものがほとんどである。



7. 1966年1月7日付
レーモンドからラング神父宛の書簡

(3) 第二ヴァチカン公会議の影響

1962年に始まった第二ヴァチカン公会議は20世紀のカトリック教会において最も重要な出来事であり、現代に至るまで大きな影響を及ぼしている。教皇ヨハネ23世はカトリック教会の刷新を図り、現代にふさわしい形でイエス・キリストの福音を宣べ伝えることができるように教会を現代化し、分裂しているすべてのキリスト教会や諸団体が再び結びつき新たな道を歩み始める決意を明らかにした。ヨハネ23世逝去の後、後任のパウロ6世に引き継がれ、最終的に16の公文書が交付され、1965年に第4会期をもって閉会した。

第二ヴァチカン公会議の教令に基づいて刷新されたローマ・ミサ典礼について著された『ローマ・ミサ典礼書の総則(1969)』の「第5章：感謝の祭儀を執行するための教会堂の配置と装飾」には、「中央祭壇は、容易に回り[ママ]を回ることができるよう、また会衆に対面して祭儀を行なうことができるように、壁から離して建造する。またその位置は、全会衆の注意がおのずから集まる真に中心となる場所であるようにする」「司式司祭の座席は、会衆の座長としての役割と、祈りを指導する役割とを表さなければならない。したがって、その位置は、司祭席の奥に会衆に対面して設けられることがきわめて適当である」などと記述されている。

司式司祭らミサを執り行う者と信者らが対面することこそが、「全信者の意識的、行動的、敬虔(精神的な)参加」を求めた第二ヴァチカン公会議における典礼刷新をまさに象徴するものであり、「神の民の行為」としてのミサ典礼が聖堂の設計にも変化をもたらしたとされる。それまで祭壇が置かれた壁面に向かい信者に背を向けて行われていた司祭の司式が、信者に向かい信者とともに行うようになったことや、それまで祭壇のみを中心に行われていた儀式が、朗読は朗読台を、司式司祭の主導する祈願文や説教などは司式司祭席を中心に行われるようになるな

ど大きな変化があった。また地域や国の文化を最大限尊重する方針から、それまでラテン語で行われていたミサの言葉や歌は日本語で行われるようになった。この方針は、モダニズム建築の特徴である国際的普遍性から脱し、その土地ごとの風土や文化を活かし尊重するレーモンドの理念と図らずも通底するとも考えられよう。

着工した1964年は第二ヴァチカン公会議の只中であり、ローマで開催されている公会議の内容がどの程度伝わっていたのかは定かではないが、書簡からは新しいミサ典礼に基づく聖堂設計を意識していたことが伺える。1965年4月20日付のラング神父からレーモンド宛の書簡では、聖堂の模型の出来映えに満足していること、第二ヴァチカン公会議による聖堂内の変更については建物自体の構造には影響がなく、配置を変えることで対応できることも記されている。

(4) 新しい時代の聖堂を目指して

書簡では、聖堂の正面に段が設けられて少し高くなっている場所をサンクチュアリと表している。そこは司祭による祭儀(ミサなど)が取り行われる場所である。レーモンドの設計によって出来上がったサンクチュアリは、最奥の壁の中心に祭儀で使用する聖体のパンが収められる聖櫃(せいひつ)が置かれ、その手前には四隅と中央に十字架が刻まれた石材の中央祭壇がどの方向からも近づくことができるように3段高く固定されている。固定された朗読台や司祭席はない。

サンクチュアリに対面する会衆席は扇形に広がり、会衆の視点は自然に中央祭壇に注がれる。「信者たちは聖体拝領のために行列を作ることになるので、サンクチュアリの周りのベンチは必要ないようです(1965年4月20日付 ラング神父からレーモンド宛)」「信者たちが聖体拝領のために行列を作る時、柵は必要ないのでしょうか。サンクチュアリと会衆席の間に段差を残すことは確かです(1965年5月5日付 レーモンドからラング神父宛)」などのやり取りがあった末に、サンクチュアリと会衆席を隔てる柵は一旦つくられたようである。その柵はいつの頃か外され、今ではわずかな段差で区切られるだけである。『現代日本建築家全集1(アントニン・レーモンド)』には、次のように記されている。

会衆に背を向けて礼拝するよりも、儀式の進行を共にする方が良いことなど、新しい空気が教会の内部から発生し始めたのである。教会建築に積極的な関心をもっていたレーモンドは、こうした意見を強く支持し、機会を待っていた。ここにあらわれた扇形プランは、それらの蓄積の上に築かれた。塔の下にある祭壇、会衆または宗徒がそれを中心に弧を描く。周辺のバルコニーは祭壇から等距離にあり、合唱は同時に湧き起る。

神言神学院は神父を目指す神学生を育てる場である。つまり、新しい考え方・方針に基づく新しい様式を備えた聖堂は、彼らの教育のために必須であったともいえる。また、教会建築は歴史的に矩形から十字形へと変化しているが、その流れにあるヨーロッパやアメリカを従来の日本では単に真似ているだけとされてきたことに不満を持つレーモンドは、何十年も試行錯誤を繰り返してプランをあたためてきた。そのなかでレーモンドが大切にしてきたものや目指すもの—日本という国・地域の文化や自然を含む置かれた環境との調和—と軌を一にするかのように典礼刷新の方向性が示され、円筒形+扇形の神言神学院に見事に結実したのではないだろうか。しかもモダニズム建築らしく構造そのものを空間表現として用いるかたちで、である。第二ヴァチカン公会議の只中に設計された神言神学院の聖堂は、レーモンドと神父たちとの対話によって完成した、旧時代旧様式の過渡期的要素を一部に残しながらも、新しい時代の新しい様式の聖堂である点も注目に値しよう。



8. 建設当時の神言神学院聖堂内観
(サンクチュアリと会衆席との間は柵で区切られている)



9. 現在の神言神学院聖堂内観
(サンクチュアリと会衆席との間の柵は撤去されている)

3. レーモンドの天地創造

(1) G棟のフレスコ壁画

教室棟の10カ所の壁にかかれた壁画は、レーモンドの原画から制作されたフレスコ画法によるものである。現在にも生命をもつこの古い画法が、美しい色彩を発しながら古代の世界の香りを十分に満ち、時間の流れとその空間とを人々に教えている。〔中略〕このような立派な壁画を使用されるレーモンドには心から驚かされるが、素朴な装飾の美しさが多くの人に理解され、心の中で育てられていくことを心から願うものである。

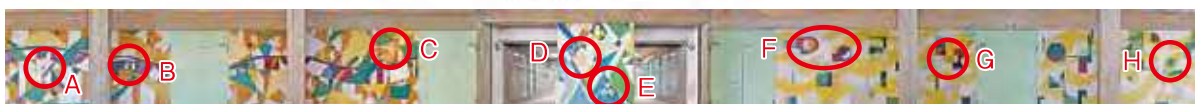
これは、新設された南山大学のキャンパスを紹介する雑誌『建築』48(1964.9)に記載されたフレスコ壁画についての文章で、文責は「石沢(澤)久夫」となっている。フレスコ画法は、壁の上塗りの漆喰が乾かず柔らかいうちに水で溶いた顔料で絵を描く代表的な壁画技法である。顔料が壁体に吸収され、乾燥する際に化学反応が生じて壁画の表面が透明の薄い膜で覆われるため、保存が極めてよいとされている。

石澤は群馬県出身の画家で、同じく群馬県出身で芸術に造詣の深い実業家の井上房一郎の紹介で、レーモンドと知り合う。石澤の画集の冒頭には「なるほどすぐれた感性をもっていたので、私が直接絵の指導をし、高名な建築家アントニン・レーモンドさんに紹介しました。〔中略〕レーモンドさんも石澤君の才能を高く評価され、レーモンドさん自らが原画を描かれた群馬音楽センターの壁画は、石澤君の手によって完成させられました」と井上の言葉が載せられている。高崎にある群馬音楽センターは本学と共通するフレスコ壁画やコンクリートの階段などの意匠がみられ、レーモンドの代表作のひとつといわれている。

『おしゃれな住まい方』によれば、レーモンドは群馬音楽センター(1958-1961)の1階ロビーと2階ホワイエの大壁面にフレスコ壁画を提供することを思いつき、石澤は1957年にイタリアから帰国した長谷川路可にフレスコ画の基本要領を学んだようである。長谷川はカトリック美術家で日本のフレスコ・モザイクのパイオニアとして知られおり、雅号の路可は洗礼名のロカに因んでいる。石澤は地元産の生石灰を砂と混ぜてキャンバスに代わる壁面をつくり、その上にレーモンドのA1版1枚の水彩画の原画に基づいて木炭でデッサンし、それを頼りに顔料をのせる工程が行われ、大壁画面には音楽とその音の響く心の表現が描かれた。このホールとホワイエの壁画は前面のガラス越しに、1-2階を通して描かれた壁面全体が見えるようになっている。

本学のフレスコ壁画は、石澤らによって群馬音楽センターから3年後に製作されており、色彩や趣、またキャンバスを歩く学生から前面のガラス越しによく見えるようになっている様子などが類似しているが、群馬音楽センターのフレスコ壁画と異なるのは、そこに自然界から用いられたキリスト教にかかわるモチーフが加えられていることである。

<キャンパスにおけるレーモンドによるキリスト教モチーフ等の配置>



10. G棟1階廊下フレスコ壁画全体

<G棟1階廊下およびG30フレスコ壁画に描かれたモチーフについて>

■G棟1階廊下

No.	フレスコ壁画	描かれたモチーフとその意味	フレスコ壁画上部の梁に施されたラテン語
A		ユリ 清純 / 無垢 / 貞節 / 至福 / 聖母マリア	HOMINIS DIGNITATI 人間の尊厳のために
B		フクロウ 英知 / 博識と学問	VITAM IMPENDERE VERO 真実のために命をかけよ
C		ハト 平和 / 愛 / 聖霊	SPIRITUS EST QUI VIVIFICAT 生かすものは霊である 【ヨハネ福音書 6 章 63 節】
D E		太陽…キリスト 三角の中に三つの円…三位一体	IN DEO UNIVERSA SUNT CONDITA 万物は神によって造られた 【コロサイ人への手紙 1 章 15-16 節】
F		円 地球 / 永遠 / 天国 / 完全	VIA VERITAS VITA 道、真理、生命 【ヨハネ福音書 14 章 6 節】
G		ハチ 勤勉 / 繁栄 / 知恵 / 支配 / 秩序 / 雄弁 / 復活	LEX LIBERTATIS LEX CHARITATIS 自由の法は愛の法 (『南山学園史料集5』には「CHARITATIS」ではなく「Amoris」とある)
H		ワタリガラス (もしくはハト) 再臨 / 夜明け / 全知 / 縁起が 良い鳥 *鳥が2カ所に描かれており詳細は 不明。ノアの箱舟から最初に放た れたのがワタリガラスとされる。	PAX IN ORBE TERRARUM 地上に平和あれ

・ラテン語の日本語訳は『アルベルト・ボルトと南山学園 (南山学園史料集5)』の『南山大学 教育と学生生活』(1966)による
・モチーフとその意味は『キリスト教美術シンボル事典』『教会』の読み方: 画像や象徴は何を意味しているのか』による

■G30

No.	フレスコ壁画	描かれたモチーフとその意味	フレスコ壁画全体
I		十字架 生命の象徴、創造	
J		魚 キリスト	

11. A～J G棟1階廊下およびG30 フレスコ壁画のモチーフ

そして、G棟1階廊下のフレスコ壁画上のコンクリートの梁には、7つのラテン語の言葉が施されている。7つの言葉は無作為に書かれたように見えるうえに、リノベーションにより天井が下がり気付きにくいのが、フレスコ壁画のモチーフと呼応するような言葉が記されているのが興味深い。向かって一番左側の清純を表すユリのモチーフがあるフレスコ壁画の上の梁には南山学園の教育モットー「HOMINIS DIGNITATI(人間の尊厳のために)」が記されている。

1963年9月20日開催の学園理事会の記録によると「大学新校舎について」の議題の中で「廊下壁面をフレスコで飾る件について」が報告され、1964年4月10日開催の学園理事会では「大学新校舎フレスコの銘は左の如くする」とあり、7つのラテン語の言葉が報告されている。さらにこの7つのラテン語の言葉は、1966年度の新入生全員に配付された『南山大学 教育と学生生活』の「カトリック大学の理念」の中で詳細な説明とともに紹介されている。またボルト神父による『私立学校である南山学園の使命(手稿)』(1974年5月17日)には、「大学が今の校舎に移転した時にこの精神をいろいろなスローガン(標語)で示そうとしました。[中略]大学の教室の廊下を書いて貰いました」とある。レーモンドのフレスコ壁画に触発されて、完成したフレスコ画の上に記したのでだろうか。

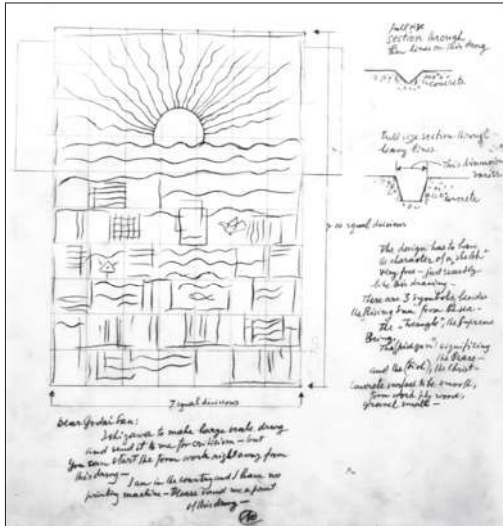
『南山学園創立75年記念誌』にはフレスコ壁画のデザインはレーモンド、色彩はノエミによるもので、費用はレーモンドによって寄附されたことが記されている。大学紛争時代には学生がフレスコ壁画の上にスプレーで落書きし、その落書きを消す際に壁画も削られてしまったことも記されており、色褪せたフレスコ壁画には60年間の爪痕が残されている。

1964年5月30日に開催された新校舎落成式の挨拶の中で、ボルト神父はこの7つのラテン語の言葉に言及するとともに次のような言葉を残している。

南山大学はキリスト教を背景とし基礎とした学問の座として、社会に最も影響をおよぼす立場にあります。教室の廊下のfrescoの上にラテン語の言葉が記してあります。この言葉のうちに我々の精神が表は[ママ]されております。南山大学が名古屋と中部地方のためにこれらの言葉であらわしている精神のセンター、生命のみなもとなるように祈ります。

(2) M棟の鉄製レリーフ

フレスコ壁画の制作から約10年後の1973年、キャンパスに新棟が増設された際にM棟の南面の外壁に鉄製レリーフが取り付けられた。鉄製レリーフのデザインはレーモンドのスケッチに基づくもので、南山アーカイブズにはスケッチとメモのコピーが残されている。レーモンドは1973年に日本を離れてアメリカに移り住んでいるので、鉄製レリーフはレーモンドの日本における最晩年の作品とも言えるのではないだろうか。また、メモには「Ishizawa」の名前が記されていることから、フレスコ壁画を制作した石澤が、鉄製レリーフの制作にもかかわっていたようである。



12. 鉄製レリーフのスケッチとメモ

<レーモンドのメモ書きの訳>

- ・縦に十等分
 - ・横に七等分
 - ・この図面に描かれた細線のフルサイズ(原寸大)の断面図
 - ・(この図面に)描かれた太線のフルサイズ(原寸大)の断面図(断面図の)この寸法はさまざまです。
- コンクリート
- ・デザインは、描かれたスケッチそのままに自由でのびのびとした感じに。海から昇る太陽の横に3つのシンボルがあります。「三角形」は至高の存在、「ビジョン(鳩)」は平和、「魚」はキリストを意味します。コンクリートの表面は平滑にし、木で形を作り、小さく削る。
 - ・親愛なる五代さんへ：
石澤さんには大きなスケールのデッサンを描かせ、批評のため私に送らせてください。でもあなたはこのデッサンからすぐに型枠の作業に取りかかることができます。私は田舎にいるので印刷機がありません。このデッサンのプリントを送ってください。

鉄製レリーフはレーモンドのスケッチに基づいて、ほぼ忠実につくられている。しかしながら昇る太陽の中にはスケッチには見られない小さな十字架が加えられている。

1974年には本学創立25周年を記念して、野球場として使われていたM棟に面する場所に芝生を敷き詰め、グリーンエリアが整備された。大学広報誌『南山(Nanzan University Bulletin)』49(1974.3.24)には



14. M棟鉄製レリーフ(2013年3月29日)
下方につづられているのは初代学長アロイス・パッヘ(PACHE, Alois, SVD) 神父を記念するレリーフ

「近代的な教室棟や太陽の壁画、研究棟などを背景にして、三々五々と憩う学生たちの姿がみられるようになるのも、そんなに遠くはないであろう」と整備中のグリーンエリアが紹介され、第3代学長のヨハネス・ヒルシュマイヤー神父(HIRSCHMEIER, Johannes, SVD)が「太陽の壁画の前には噴水を配して庭園風にしつらえたい」と語っていることも記されている。このことから、鉄製レリーフは当時「太陽の壁画」と呼ばれていたことがわかるが、それから30年ほど過ぎた『Nanzan Bulletin』153(2005.6.30)では、「真理の源であり神の象徴としての光一太陽に十字架を、天と地と海を分け、そこに鳥や魚をあしらうなど『旧約聖書』の『天地創造』をモチーフに、カトリック大学にふさわしい本学のシンボルとして表現されている(南山大学建築探訪: パッヘスクエアの壁画)」と紹介されている。鉄製レリーフ設置から30年も経て、唐突に「天地創造」をモチーフにしていると紹介されたのはなぜなのだろうか。



13. 完成直後のM棟鉄製レリーフ

(3) 旧約聖書の天地創造

レーモンドがデザインした鉄製レリーフは果たして「天地創造」をモチーフにしているのだろうか。2005年以前にはそのような記述は見当たらないようである。しかしながら旧約聖書を知る多くの人々は、この鉄製レリーフを見たときにはやはり「天地創造」の物語を思い浮かべるに違いない。

ユダヤ教やキリスト教の聖典である旧約聖書に書かれている天地創造の物語を簡単に紹介してみよう。フランシスコ会聖書研究所訳注による『聖書』では創世記のもとに以下のように訳されている。

初めに、神は天と地を創造された。地はむなしく何もなかった。〔中略〕神は仰せになった、「光あれ」。すると、光があった。神はその光を見て善しとされた。神は光と闇とを分けて、光を「昼」と名づけ、闇を「夜」と名づけられた。そして夕べとなり朝となり、一日目がすぎた。

次に、神は仰せになった、「水の中に大空あれ。そして水と水とを分けよ」。すると、そのとおりになった。神は大空を造り、その下の水と上の水とを分けられた。神は大空を「天」と名づけられた。そして夕べとなり朝となり、二日目も過ぎた。

次に、神は仰せになった、「天の下の水は一か所に集まれ。そして乾いたところが現れよ」。すると、そのとおりになっ

た。神は乾いた所を「地」と名づけ、水の集まった所を「海」と名づけられた。神はそれを見て善しとされた。また神は仰せになった、「地は草木で青くなれ。種をもつ草と、種をもち実を結ぶあらゆる種類の木で地の面は青くなれ」。〔中略〕そして夕べとなり朝となり、三日目が過ぎた。

次に、神は仰せになった、「天の大空に光るものあれ。昼と夜とを分け、季節と日と年とを定める徴(しるし)となれ。また天の大空にあって、地を照らす光となれ」。すると、そのとおりになった。神は二つの大きな光るものを造り、そのうちの大きなものに昼を治めさせ、小さなものに夜を治めさせ、また星も造られた。〔中略〕そして夕べとなり朝となり、四日目が過ぎた。

次に、神は仰せになった、「水は生き物の群れで豊かになれ。また鳥は地と天の大空との間を飛べ」。〔中略〕「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ、また鳥は地に増えよ」。そして夕べとなり朝となり、五日目が過ぎた。

次に、神は仰せになった、「地はあらゆる種類の生き物、すなわちあらゆる種類の家畜、地を這うもの、野の獣を生み出せ」。すると、そのとおりになった。〔中略〕次に、神は仰せになった、「われわれにかたどり、われわれに似せて人を造ろう。そして人に、海の魚、空の鳥、家畜、野のすべての獣、地を這うすべてのものを治めさせよう」。神はご自分にかたどって人を創造された。人を神にかたどって創造され、男と女に創造された。〔中略〕神はご自分がお造りになったすべてのものをご覧になった。それは極めて善かった。そして夕べとなり朝となり、六日目が過ぎた。

こうして、天と地と万物は完成した。神は行われていたその業を七日目に完成された。そして行われたすべての業を七日目に休まれた。神はすべての創造の業を七日目に休まれたので、その日を祝福して聖なる日とされた。これが天地創造の経緯である。

おわりに

1961年8月のある暑い日にレーモンドは初めて本学のキャンパス予定地を訪れ、尾根に続く細い道を歩き、四方からの微風を体に受け、東西両方面に広がる素晴らしい眺望を見て、その場ですぐにその尾根を敷地設計の基本として尾根に跨って建つ数々の建物をイメージすることができた、と当時を振り返り、あたかも建築的な啓示を受けたかのように記している。そして最初に8つの建物群を設計し、キャンパスの中央にあたる校舎の大小12の壁面に、キャンパスを行き交う学生たちから見えるようにフレスコ画を描き、その中に十字架や、太陽・魚・鳥などキリスト教にかかわるモチーフを配置した。

その後1973年の校舎増築の際に、レーモンドは十字架や太陽・魚・鳥などを一堂に集めた鉄製のレリーフをデザインし、人びとが集うパッセスクエアから見える校舎の外壁面に取り付けた。はじめにフレスコ壁画に点在した十字架・太陽・魚・鳥などのモチーフは、10年を隔てて1枚の鉄製レリーフとして再生されたのである。

レーモンドはフレスコ壁画や鉄製レリーフにタイトルを付けなかったようであるし、なんの説明も残していない。他方、「大昔から日本人は、人間の生命が、大自然と結びついていることに、極めて興味をもっていた。これは西洋人の観念では、人間が自然界の帝王であるのとは反対である。人間は、大自然を支配しているのではなく、大自然の状態や、部分のように、日本人も大自然の一部であると信じている」「大自然は、その絶対価値といえるものが、人間のはかなさに対してあるのだということを日本人に対して浸透させてきた。日本人は、その絶対価値、無限、不変とを原則として、また、自然の法則として認めている」(『私と日本建築』)とも述べている。また本学に関し



15. 大学案内誌の表紙



て「自然と建築：南山大学の設計について」の中で、「この敷地の特性は『不均衡』と高低の変化に最も適していますので、私はこの特性を活かしてあたかも地下にしっかり根をおろした植物が枝を張るように、この敷地には地面から建物が自然に育ち広がっているような状況がふさわしいと思います」と書いており、これらを重ね合わせるとあたかも天地創造の物語を彷彿とさせる、というのは言い過ぎだろうか。

もちろん自分の設計・建築を天地創造になぞらえるような不遜な思いは、レーモンドには微塵もなかったであろう。「もし私が真の日本の伝統を、記念碑的でなく人間的尺度として維持しうるならば、また真に機能的なデザインを保てるならば、もしもあらゆる意味で単純で、直截で、経済的に保てるならば、そしてまた装飾といえば構造自体であるといえるデザインをした時こそ、私は何か本当に価値のあるものを創り出したのである」「日本が教えてくれた絶対価値について、私は個人的には今も忠実である」「私は、この宇宙の中に何か不思議な秩序があり、宇宙の万物はこの秩序の絶対価値に従って創られていると信じている。これらの価値は今も将来も永遠に同じであり、不変のものであろう」というレーモンドの言葉のとおり、「本当に価値のあるものを創り出した」だけなのに違いない。

レーモンドのデザインした鉄製レリーフは何年にもわたって『大学案内誌』の表紙を飾り、今ではキャンパスのシンボリックな存在となり、2011年に新しくつくられたR棟のフラッテンホルルの緞帳に、2017年に増築されたQ棟のレンガ色の壁に、そのデザインが繰り返し用いられている。

レーモンドの設計によってこの地に8つの校舎が建てられてから60年。打ち放しのコンクリートに施された赤土色の壁は2017年から2021年にかけておこなわれたレーモンド・リノベーション・プロジェクトにより当初に近い色に蘇った。次の暦の還りに向けて、この自然に配慮された緑豊かなキャンパスで、その恵みを楽しむ自由と平和に感謝しつつ、教育と学問に真摯に取り組み続ける決意を、私たちは新たにしている。



16. R棟 1階フラッテンホルルの緞帳



17. Q棟 2階壁面

別表：神言神学院所蔵の書簡（レーモンドと神言修道会との間で取り交わされたもの）

No	日付	差出人	宛先	書簡の概要	言語	枚数
1	1962. 11. 15 (New Hopeにて)	RAYMOND	BOLD* ¹	ボルト神父の意見・要望に対するレーモンドの回答	英語	3
2	1963. 1. 25 (東京にて)	RAYMOND	BOLD	シュライバー神父* ² との会合の内容(神学校とピオ館* ³)	英語	1
3	1963. 2. 20 (東京にて)	RAYMOND	BOLD	第3期計画(神学校とピオ館)のD案からE案への変更点	英語	4
4	1963. 4. 16	RAYMOND	BOLD	神父の部屋と神学生の部屋の詳細図	英語	1
5	1963. 6. 30 (多治見にて)	LANG* ⁴	RAYMOND	神学校の部屋および教会の提案書	独語	1
6	1963. 7. 9 (多治見にて)	LANG	RAYMOND	聖堂の祭壇の位置と高さ	独語	1
7	1963. 10. 7	BOLD	RAYMOND	ピオ館(風呂やフローリング)	英語	1
8	1963. 10. 7	BOLD	RAYMOND	神学校(風呂、神学校の黒板、スクリーン、フローリング)	英語	1
9	1963. 12. 11 (多治見にて)	(LANG)	RAYMOND	最終計画案についての確認	独語	1
10	1963. 12. 17 (東京にて)	RAYMOND	BOLD	第3期計画の見積と最終的な数字の報告ならびに削減案	英語	3
11	1964. 2. 18	RAYMOND	SCHREIBER	施工業者との調整結果に基づく削減	英語	2
12	1964. 3. 25 (東京にて)	RAYMOND	SCHREIBER	第3期計画にかかる費用の上昇	英語	2

No	日付	差出人	宛先	書簡の概要	言語	枚数
13	1964. 3. 26 (東京にて)	RAYMOND	SCHREIBER	(3/25 書簡の追加事項) 施工業者の工事着手の遅れに対する懸念事項 (価格上昇や金利変動)	英語	1
14	1964. 4. 30 (東京にて)	RAYMOND	BOLD	神学校の図面の送付	英語	1
15	1964. 5. 11 (東京にて)	RAYMOND	BOLD	ヨーロッパ渡航についての南山大学からの公文書 (ローマでの公務滞在) 作成のお願い	英語	1
16	1964. 5. 25 (東京にて)	LEAVITT*5	BOLD	第3期計画の修正案の送付および6月の施工業者との最終合意に向けて	英語	1
17	1964. 6. 19	LEAVITT	LANG	新しい区画計画で生じる問題の解決策 (図面4枚送付)	英語	1
18	1964. 7. 11	LANG	LEAVITT	神学校 (講義用の椅子や机と列の幅、電話、電気時計と呼び鈴)	英語	2
19	1964. 7. 30 (東京にて)	LEAVITT	LANG	8月の会合とレーモンドの帰国予定	英語	1
20	1964. 9. 7	LANG	RAYMOND	レーモンド不在中の進捗確認	英語	4
21	1964. 9. 27 (多治見にて)	(LANG)	RAYMOND	神父の部屋 (書棚)	独語	1
22	1964. 9. 30 (東京にて)	RAYMOND	LANG	神父の部屋 (書棚・ベッド・机など)	英語	1
23	1964. 10. 12 (多治見にて)	(LANG)	RAYMOND	神父の部屋 (書棚・クローゼット)	独語	2
24	1964. 10. 19 (東京にて)	RAYMOND	LANG	(ラング神父の独語書簡への返事) 施工業者からの見積の確認と交渉のため来名予定	英語	1
25	1964. 10. 20 (東京にて)	LEAVITT	LANG	(ラング神父の質問に返答するようレーモンドが依頼) 神父の部屋 (スクリーン・書棚・ベッドなど)	英語	1
26	1964. 11. 11 (多治見にて)	(LANG)	RAYMOND	神学生の4人部屋と6人部屋 (コンセント・クローゼット)	独語	2
27	1964. 11. 16 (東京にて)	RAYMOND	LANG	神学生の部屋	英語	1
28	1965. 1. 19 (東京にて)	RAYMOND	LANG	ドイツの聖櫃製作家へ送る聖域の写真と図面送付 (写真2枚添付)	英語	1
29	1965. 2. 1	RAYMOND	BOLD	アシスタントの追加依頼 (氏名や費用など)	英語	1
30	1965. 2. 4	LANG	RAYMOND	アシスタントの追加に係るシュライバー神父の許可	英語	1
31	1965. 2. 9 (東京にて)	RAYMOND	LANG	2/3の奥氏 (機械技師) とラング神父の打合せ報告書の送付	英語	2
32	1965. 3. 15	LANG	RAYMOND	神学校のドアの鍵	英語	1
33	1965. 3. 23 (東京にて)	RAYMOND	LANG	(3/15付ラング神父書簡への返事) 神学校のドアの鍵	英語	1
34	1965. 4. 2 (東京にて)	RAYMOND	LANG	工事の開始時の写真送付 (写真6枚添付)	英語	1
35	1965. 4. 20	LANG	RAYMOND	聖堂模型のお礼および第二ヴァチカン公会議に伴う変更	英語	2
36	1965. 4. 23	RAYMOND	LANG	(4/20付ラング神父書簡への返事) 新しいミサの構成への関心	英語	1
37	1965. 5. 5	RAYMOND	LANG	前立腺の病気および手術および第二ヴァチカン公会議に伴う変更への意見・質問	英語	1
38	1965. 5. 22 (多治見にて)	(LANG)	RAYMOND	聖堂と地下聖堂の祭壇・聖櫃・聖体拝領ベンチの大きさや設置位置・高さ	独語	3
39	1965. 5. 24 (東京にて)	RAYMOND	LANG	(5/22付ラング神父書簡への返事) ラング神父の意向の理解	英語	1
40	1965. 5. 30 (多治見にて)	(LANG)	RAYMOND	聖堂の主祭壇 (天然石)	独語	1
41	1965. 5. 31 (東京にて)	RAYMOND	LANG	祭壇のデザインならびに日本建築学会賞祝辞のお礼	英語	1
42	1965. 6. 3 (多治見にて)	(LANG)	RAYMOND	(5/31付レーモンド書簡への返事) 祭壇装飾の再計画	独語	1

No	日付	差出人	宛先	書簡の概要	言語	枚数
43	1965. 10. 4 (東京にて)	RAYMOND	LANG	手術後の状況報告	英語	1
44	1965. 11. 26	LANG	RAYMOND	佐藤氏から聞いた追加作業および聖域の変更 (イタリアの大理石)	英語	1
45	1965. 11. 29 (東京にて)	RAYMOND	LANG	追加料金	英語	1
46	1965. 12. 2	LANG	RAYMOND	(11/29 付レーモンド書簡への返事) 聖堂の聖櫃デザイン	英語	1
47	1965. 12. 21	LANG	RAYMOND	第二ヴァチカン公会議の変更に伴う祭壇や聖櫃のデザイン	英語	1
48	1965. 12. 24 (東京にて)	RAYMOND	LANG	変更点と追加作業	英語	2
49	1965. 12. 31	LANG	RAYMOND	新年の挨拶、クリスマスプレゼントのお礼、追加工事、聖櫃のデザイン	英語	2
50	1966. 1. 7 (東京にて)	RAYMOND	LANG	(12/31 付ラング神父書簡への返事) 聖櫃のデザイン	英語	1
51	1966. 3. 17	RAYMOND	ZIMMERMAN ^{*6}	進捗状況と入居予定時期の延期	英語	1
52	1966. 3. 20	LANG	RAYMOND	(3/17 付レーモンドからジンマーマン神父への書簡について) ジンマーマン神父への連絡のクレーム	英語	1
53	1966. 3. 23	RAYMOND	LANG	(3/20 付ラング神父書簡への返事) ジンマーマン神父への連絡のお詫び	英語	1

*1: アルベルト・ボルト神父 (BOLD, Albert, SVD)、第7代南山学園理事長 (1963-1984)

*2: ゲルハルト・シュライバー神父 (SCHREIBER, Gerhard, SVD)、第6代南山学園理事長 (1960-1963)

*3: 当時、神父らの居住スペースとしてピオ11世館があったことから、居住スペースを指す言葉として使われていたと思われる。

*4: アルトゥール・パウル・ラング神父 (LANG, Artur Paul, SVD)、当時南山大学神学科長

*5: デービッド・L・リーヴィット (LEAVITT, David L.)、レーモンドが日本を離れている時にレーモンドの代理として神言修道会の窓口になっていたと思われるレーモンド建築設計事務所員

*6: アンソニー・ジンマーマン神父 (ZIMMERMAN, Anthony, SVD)、神言神学院長 (1966-1969)

掲載写真

No	写真	提供
1	M棟鉄製レリーフとパッセスクエア	大学 Web ページ
2	アントニン・レーモンド	大学 Web ページ
3	レーモンド (左) とフランク・ロイド・ライト	大学 Web ページ
4	新校舎落成式でのレーモンドとノエミ (1964年5月30日)	南山アーカイブズ
5	神言神学院全景	南山アーカイブズ
6	神言神学院聖堂西側 (2012年撮影)	南山アーカイブズ
7	1966年1月7日付レーモンドからラング神父宛の書簡	図書館事務室撮影
8	建設当時の神言神学院聖堂内観	南山アーカイブズ
9	現在の神言神学院聖堂内観	大学 Web ページ
10	G棟1階廊下フレスコ壁画全体	大学 Web ページ
11	G棟1階廊下およびG30 フレスコ壁画のモチーフ (A~J)	図書館事務室撮影
12	鉄製レリーフのスケッチとメモ	南山アーカイブズ
13	完成直後のM棟鉄製レリーフ	南山アーカイブズ
14	M棟鉄製レリーフ (2013年3月29日)	南山アーカイブズ
15	大学案内誌 (1977・1978・1980) の表紙	南山アーカイブズ
16	R棟1階フラッテンホールの緞帳	大学 Web ページ
17	Q棟2階壁面	大学 Web ページ

【引用・参考文献】

●論文・記事

- ・「神秘的自然主義建築家アントニン・レーモンドの見た風景の原像：流浪（ディアスポラ）するコスモポリタン(3)-(7)」松野高久(近代建築)76(3), p.54-57, 2022.3 / 76(4), p.34-37, 2022.4 / 76(9), p.58-61, 2022.9 / 76(11), p.42-44, 2022.11 / 77(1), p.34-37, 2023.1
- ・「神秘的自然主義建築家アントニン・レーモンドの見た原像：流浪（ディアスポラ）するコスモポリタン(2)」松野高久(近代建築)76(1), p.36-39, 2022.1
- ・「神秘的自然主義建築家アントニン・レーモンドの原象：流浪（ディアスポラ）するコスモポリタン(1)」松野高久(近代建築)75(12), p.44-47, 2021.12
- ・「南山大学の設計に於ける『建築家アントニン・レーモンド』」北澤興一(南山学園のレーモンド建築, 下), p.78-79, 2014.3
- ・「教会建築における空間と祭祀行動に関する研究：教会建築設計の背景となる典礼等宗教的行事の整理と考察」村上晶子, 湯本長伯(日本インテリア学会論文報告集)23, p.109-116, 2013.3
- ・「南山大学建物探訪：『パッヘスクエア』の壁画」(NANZAN Bulletin)153, 2005.6
- ・「創立25周年 発展する南山」(南山)25, p.1, 1974.3
- ・「南山大学」レーモンド建築設計事務所(建築)48, p.38-70, 1964.9

●資料

- ・チャップコヴァー・ヘレナ編著『非凡の人三田平凡寺：趣味家集団「我楽他宗」の磁力』(かもがわ出版, 2024)
- ・南山大学史料室編『南山学園のレーモンド建築(下)』(南山学園, 2014)
- ・内藤恒方, 土屋重文解説；宮本和義撮影『チャーチ&チャペル：アントニン・レーモンド：日本：1935-1970』(バナナブックス, 2013)
- ・R. テイラー著；竹内一也訳『「教会」の読み方：画像や象徴は何を意味しているのか』(教文館, 2013)
- ・三沢浩著『おしゃれな住まい方：レーモンド夫妻のシンプルライフ』(王国社, 2012)
- ・フランシスコ会聖書研究所訳注『聖書：原文校訂による口語訳』(サンパウロ, 2011)
- ・南山大学史料室編『アルベルト・ボルトと南山学園』(南山学園史料集5) (南山学園, 2010)
- ・『Hominis dignitati 1932-2007：南山学園創立75周年記念誌』(南山学園, 2007)
- ・三沢浩著『A・レーモンドの建築詳細』(彰国社, 2005)
- ・山口昌男著『内田魯庵山脈：「失われた日本人」発掘』(晶文社, 2001)
- ・三沢浩著『アントニン・レーモンドの建築』(鹿島出版会, 1998)
- ・ジェニファー・スピーク著；中山理訳『キリスト教美術シンボル事典』(大修館書店, 1997)
- ・石澤久夫『蘇と今絵：画集』(石澤久夫, 1990)
- ・長谷川堯著『建築：雌の視角』(相模書房, 1973)
- ・『アントニン・レーモンド』(現代日本建築家全集1) (三一書房, 1971)
- ・アントニン・レーモンド著；三沢浩訳『自伝アントニン・レーモンド』(鹿島研究所出版会, 1970)
- ・*書名のない引用は『自伝アントニン・レーモンド』による
- ・典礼委員会編集部編『ローマ・ミサ典礼書の総則』(カトリック中央協議会文書事業部, 1969)
- ・A. レーモンド著；三沢浩訳『私と日本建築』(SD選書17) (鹿島出版会, 1967)

(石田 昌久、加藤 富美、伊藤 禄美、伴 祐美子、林 志麻、渡部 陽香)

「カトリック文庫」

「カトリック文庫」では、近代日本におけるキリスト教史の研究に資する資料群の構築を目的として、明治・大正・昭和初期のキリスト教関係出版物等を収集しています。これまで、聖書、祈祷書、聖歌集、要理書およびそれらの解説書、布教資料、聖人伝などを、多くの皆さまからご寄贈いただきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。また、従来からの資料に加えまして、お手元に教会・修道会史資料(教会・修道会刊行物)などがございましたら、引き続きご寄贈を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

南山大学ライネルス中央図書館カトリック文庫通信
カトリコス No.39 2024.11.1発行
編集・発行：カトリック文庫グループ
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18
Phone : 052(832)3163 / Fax : 052(832)3462
* 図書館Webページでもご覧いただけます。
<https://office.nanzan-u.ac.jp/library/>

YaMazat60